

オリンピックの「芸術競技」

——ヒトラーのオリンピックと芸術——

大野益弘

はじめに

近代オリンピックはピエール・ド・クーベルタン（一八六三～一九三七）によって提唱され、一八九六年に第一回大会がアテネで行われた。それ以降四年ごとに開催され、二〇二〇年の東京オリンピックで三二回目を迎えることになる。途中、戦争で数回中止になったが、百二十年以上の長きにわたり続いているのである。

いうまでもなく、オリンピックは世界最高の「スポーツの大会」である。ここでは、生身の人間が身体運動によって競うのである。だが、かつては公式競技としてモーターボート（第四回一九〇八年ロンドン大会）が行われたことがあるばかりか、第二回一九〇〇年パリ大会の公開（デモンストレーション）競技では気球や魚釣りなど、現在から見ればおおよそオリンピックらしくない競技が行われたことがある。しかし、それらよりもさらにスポーツ的要素＝身体運動を欠いた競技が行われたことがある。日本が初めてオリンピックに参加した第五回一九一二年ストックホルム大会から第一四回一九四八年ロンドン大会まで、「芸術」という名

の競技が「正式に」行われていたのだ。

オリンピックの芸術競技では、「芸術」に対してスポーツ競技と同様に順位がつけられ、作家である芸術家に対して金銀銅のメダルが授与された。日本も第一回一九三六年ベルリン大会で銅メダルを二個獲得しているのである。

では、はたして芸術競技は誰がどのような目的で始めたのか、そして行われなくなった原因は何か。本稿ではそれらについて考察するとともに、作品の評価基準やその傾向について、最も大きな規模で行われ、日本人がメダルを獲得した一九三六年ベルリン大会を例にとり、考察していきたい。

一 オリンピックの芸術競技

オリンピックの芸術競技は、近代オリンピックを提唱したクーベルタンの強い希望により導入されたものである。建築、彫刻、絵画、音楽、文学の五部門について、各国の芸術家の作品をオリンピック開催地に集め、それを採点して順位をつけ、スポーツ競技と同様にメダルを授与した。

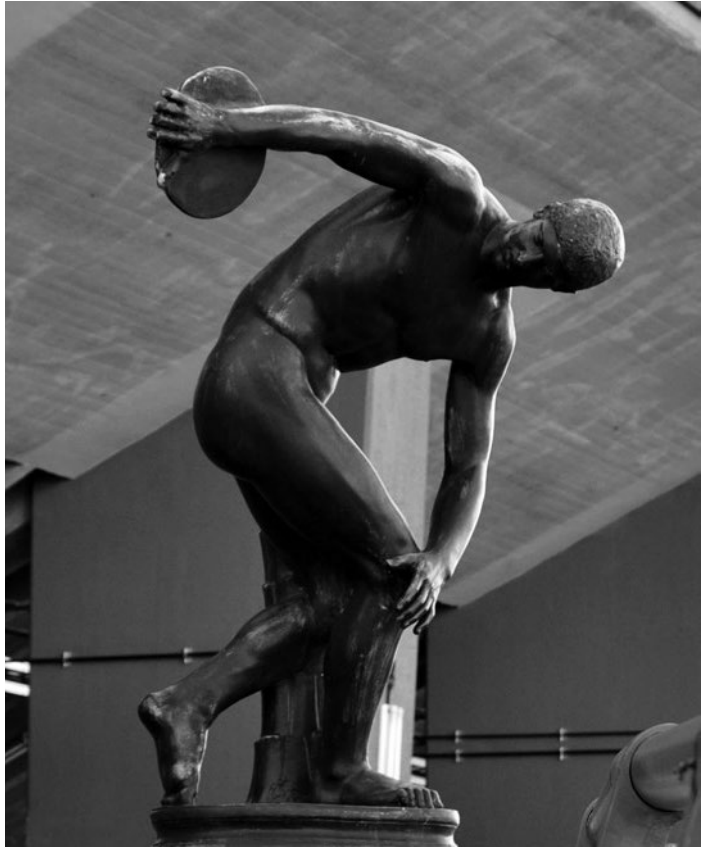


図1 ミュロン「デイスコボロス(円盤投げ競技者)」
(於：旧国立競技場 筆者撮影)

クーベルタンが芸術をオリンピック競技として正式に導入するにあたっては、概ね次のように言われている。

「クーベルタンは、古代オリンピックにならない、スポーツと芸術の両方の競技を考えた。それは心身ともに調和のとれた若者を育成するというオリンピックズムの理念に基づいていた」^①

じつは古代オリンピックにも、芸術競技と呼べるような試合があった。「ラッパ吹き」である。これは、競技の開始に先立って、ラッパを吹いてその巧拙を競うのである。勝利したラッパ奏者は、その後に行われる競技の際のラッパ吹き、つまりファンファーレを吹くという榮譽を得る。

これは、上手なファンファーレ奏者を選ぶための目的合理的なコンペであり、鑑賞に値する芸術を選ぶためのコンテストとはいささか趣旨が異なるが、「芸術の完成度を競う」という意味では類似の競技と考えることができる。古代オリンピックではそれ以外にも、詩の朗読や竖琴、彫刻、絵画などの芸術が披露された。その背景には、ミュロン作の「デイスコボロス(円盤投げ競技者)」(図1)に代表される、当時のギリシャで理想とされた「美にして善」^②「カロカガティア」の思想があった。このようにスポーツと芸術が融合した古代オリンピックをクーベルタンは復興させようとした。スポーツだけでなく芸術も必要と考えたのである。

近代オリンピックへの芸術競技導入の道筋がついたのは、一九〇六年にクーベルタンが開催した「芸術と文学とスポーツに関する諮問会議」であった。この会議でクーベルタンは「偉大な結婚」というテーマで講演を行い、筋肉と精神、すなわちスポーツと芸術の融合の必要性を説いた。^③このクーベルタンの提案は満場一致で承認され、その後、一九二二年ストックホルム大会から芸術競技が開始されたのである。

二 芸術競技の実施と日本の参加

ようやく実施にこぎつけた芸術競技だったが、初回となるストックホルム大会での芸術競技の開催は簡単ではなかった。作品の集まりがよくなかったのである。そのため、彫刻のみが金メダルと銀メダルを獲得した作品があったものの、ほかの四部門(絵画、建築、音楽、文学)は金メダルのみで、銀メダルと銅メダルは該当なしという結果に終わっている。しかも、文学部門の金メダリストは「スポーツ賛歌(原題/Ode au

Sport)」という詩を書いた「ジョルジュ・オロー(Georges Hohrod)とM・エシュバッハ(M. Eschbach)」という連名の作家となっているが、この名前は、当時の国際オリンピック委員会(IOC)会長クーベルタンのペンネームあるいは偽名とされている。⁴⁾

そのストックホルム大会の四年後にあたる一九一六年第六回ベルリン大会は、第一次世界大戦のため中止になったが、一九二〇年以降再びオリンピックは開催され、芸術競技はなんとか軌道に乗る。日本がこの競技に参加したのは一九三二年第一〇回ロサンゼルス大会と一九三六年第一一回ベルリン大会の二大会であった。

ロサンゼルス大会への出品にあたって日本は、前年の一九三二年(昭和六)に大日本体育芸術協会(現在の日本スポーツ芸術協会)を設立し、その十月に「公募」ならびに「協会会員による無審査作品の出品」を募った。その結果、翌一九三二年七月までに三百点を超える作品を集めることができた。公募作品については日本画三点、西洋画六点、版画一五点、彫刻三点の合計二七点を選出。無審査作品二〇と合わせて四七点を出品した。ただし、無審査作品についてはオリンピックにおいて参考品展覧会に出品。公募作品のみを競技に出している。作家には、日本画の荻生天泉(一八八二〜一九四五)、西洋画の小杉未醒(放菴、一八八一〜一九六四)、版画の棟方志功(一九〇三〜七五)らが名を連ねていた。競技では、メダルこそ獲得できなかったが、版画部門の長永治良(二八九三〜一九六二)が「蟲相撲」で選外佳作に選ばれている。⁵⁾

その四年後のベルリン大会では、大日本体育協会(現在の日本スポーツ協会)と大日本体育芸術協会がさらに力を入れることになる。この大会の日本国内における作品の選考については、四年前と同様、無審査作品

と審査のある公募作品をともに出品する方法で行われた。公募についてはオリンピック前年の一九三五年十一月に記者発表するとともに宣伝告知を開始。音楽部門は翌一九三六年二月、ほかは三月に締め切った。無審査作品も三月に集め、四月に発送した。この大会のオリンピック芸術競技には、四年後に予定されていた一九四〇年東京オリンピック(のちに返上)の芸術競技のための調査員として、日本からベルリン留学経験のある音楽家・諸井三郎(一九〇三〜七七)、東京大学教授を務め安田講堂の設計にも携わった建築家・岸田日出刀(一八九九〜一九六六)が派遣された。

出品作品は、絵画三七点、版画二六点、彫刻九点、工芸二点、建築五点、音楽五点、合計八四点となった。このうち絵画部門で鈴木朱雀(一八九一〜一九七二)の「古典的競馬」と藤田隆治(一九〇七〜六五)の「アイスホッケー」がそれぞれ銅メダルを獲得している。さらに、彫刻部門で長谷川義起(一八九二〜一九七四)の「横綱両構」、音楽部門で江文也(二九一〇〜八三)の「台湾の舞曲」が選外佳作に選ばれた。江文也は、当時、日本の統治下にあった台湾の出身である。

このベルリン大会の芸術競技にも日本からは、入賞者以外に、東山魁夷(絵画、一九〇八〜九九)、高田力蔵(絵画、一九〇〇〜九二)、棟方志功(版画)、佐藤敬(版画、一九〇六〜七八)、山田耕筰(音楽、一八八六〜一九六五)など、錚々たる芸術家が出品している。⁶⁾

では、なぜ八四点の作品のなかで、鈴木朱雀の「古典的競馬」と藤田隆治の「アイスホッケー」がメダルを獲得したのだろうか。

三 ヒトラーのオリンピック

一九三六年第一回ベルリンオリンピックは、ナチス政権下で行われた大会で、「ヒトラーのオリンピック」と呼ばれることもあった。その三年前の一九三三年は、アドルフ・ヒトラー（一八八九～一九四五）率いるナチスが、言論弾圧、謀略、テロなどさまざまな手段を用いて一党支配体制を確立した年である。翌年パウエル・フォン・ヒンデンブルク（二八四三～一九三四）大統領が死去すると、ヒトラーは大統領を兼ねた「総統」を名のり、事実上、独裁体制を完成させるのである。

政権掌握以前のヒトラーはオリンピックを「ユダヤ人が発明した大会」と揶揄し、否定的に考えていた。しかし、ナチスの宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルス（一八九七～一九四五）など側近が「大きなプロパガンダの機会になる」などと進言・説得した結果、ヒトラーは考えを変え、「ドイツが世界各国の招待主となるのだから、準備はどこから見ても完璧かつ壮大でなければならぬ」と言い、一〇万人を収容できるメインスタジアムの建設に着手した⁷。

一九三五年、一般の労働者や公務員は右手を斜め上に挙げて「ハイル・ヒトラー」と挨拶すること（ナチス式敬礼）が義務付けられた。そして一九三六年二月、ベルリンオリンピックに先立ち、同じドイツのガルミッシュ・シュルツェンキルヘンで冬季オリンピックが開催される。すでにユダヤ人に対する弾圧や撲滅運動を展開していたナチスは、この冬季大会を反ユダヤの大会にしようとし、ユダヤ人排斥のためのビラやポスターを貼るなどしていた。だが、それに対してI O C会長アンリ・ド・バイエール（一八七六～一九四二）が立ち向かった。

「ラッセルは『ユダヤ人排斥のビラやポスターなどの宣伝物は、すべての国、すべての民族を迎えるオリンピックにとつては、まったく不必要なばかりか有害なものであり、国際儀礼にも反する（中略）直ちに撤去していただきたい』と大きな声で要求。すると、ヒトラーは『反ユダヤ人の宣伝はドイツ政府が重要な政策として決定したことであり、あなたの要求は内政干渉である』と拒否した。それを聞いていたラッセルは（中略）『それではやむを得ない。私はI O C会長の権限で明日からの冬季大会に中止の命令を下し、夏のベルリン大会についても、開催都市を変更するほかはない』とやり返した。（中略）ユダヤ人排斥のビラやポスターはきれいに消えうせ」たのである⁸。

その半年後に行われたベルリン大会では、ヒトラーの人種差別政策が露骨に行われることはなかった。しかし、開会式でヒトラーに対し一〇万人の観客が一斉にナチス式敬礼を行うという異様な光景は、記録映画にも残っている。

I O Cがユダヤ人排斥をはじめとする人種差別政策を一時的に抑制させたとはいえ、それはオリンピック大会開催期間中だけのことであり、その後のヒトラーによる人種差別・迫害は、ますます勢いを増していった。

四 「芸術競技」の審査

前述したように、オリンピックの芸術競技は第一四回一九四八年ロンドン大会を最後に正式競技から外されている。その理由の一つが「審査基準の曖昧さ」であった⁹。

オリンピックの芸術競技は毎回審査員が変わる。その審査員の構成は

開催国出身者が常に多く、開催国に有利な評価をすることが可能だった。たとえば、一九三二年ロサンゼルス大会では、絵画、彫刻、建築、音楽の四部門にそれぞれ五人、文学のみ四人が審査に当たった。その合計二四人のうち開催国であるアメリカ合衆国以外の審査員はわずか七人。文学だけは四人中三人がアメリカ以外の審査員であったが、絵画、彫刻、建築、音楽の四部門ではそれぞれ五人中一人しか外国人審査員がいなかった。審査に当たって開催国は、影響力を行使できる立場にあったのである。

一九三六年ベルリン大会の審査員は、絵画七人、彫刻五人、建築五人、音楽九人、文学七人の合計三十三人だった。それぞれの部門での開催国ドイツ以外の審査員は、絵画四人、彫刻二人、建築二人、音楽二人、文学二人の一二二人であり、絵画以外はドイツ出身者が過半数を占めていた。日本の二作品が銅メダルを獲得した絵画の審査員七人の構成は、三人が地元ベルリンで、それ以外はウィーン（オーストリア）、ブダペスト（ハンガリー）、ブリュッセル（ベルギー）、ワルシャワ（ポーランド）であった¹¹。ただ、このうちハンガリーはドイツと近い関係にあり、その後の第二次世界大戦では枢軸国として戦った。審査員がドイツの影響下にあった可能性は高い。オーストリアについても、ドイツと関係の深い国内のナチス党が強い力をもっていたため、このときの審査員がナチス・ドイツの影響を相当程度受けていたものと推測できる。

さらに、この大会の審査は、絵画、彫刻、建築の三部門が「Painting and Graphic Arts (造形ならびに平面芸術)」というカテゴリーにまとめられ、その統括審査員として三人のドイツ人が加わっている。しかも、そのカテゴリーを含む全部門を監督する立場に、さらに四人のドイツ人

が名を連ねている。ドイツ人審査員によってがんにがらめにされたこの一九三六年ベルリン大会の芸術競技では、開催国が恣意的な審査を行うことが十分に可能だったのである。

五 攻撃され排除された「頹廢芸術」

一六歳の頃から画家を夢見ていたヒトラーは、一八歳のときにウィーン美術アカデミーを受験した。結果は不合格であったが、その後も風景画を中心に多数の絵画を描くなど、美術に対しては知識も興味もあり、彼なりの美学も持ち合わせていた。そしてヒトラーは政治に芸術を持ち込んだ。いわゆる「政治の美学化」である。

「ヒトラーが政治家になったのは、ある意味ではみずからの芸術観を実現するためだったといっても、過言ではないだろう。権力を掌握してからも、彼は自分を芸術家と見なし、芸術の問題に直接介入した¹²」

芸術は「美的価値を創造する技術」¹³であり、その美的価値は美しいと感じることは「主観的な趣味判断」¹⁴である。独自の美学をもった独裁者は、芸術競技の採点を自らの趣味判断にもとづいた基準で行った、あるいは行わせたと考えられる。

この時代、ナチスは前衛的表現の「モダンアート」を「頹廢芸術」であるとして攻撃・弾圧し、排除する運動を展開した。表現主義、ダダイスム、新即物主義、抽象絵画、シュルレアリスムの作品は押収され、売却や焼却処分された。この種の芸術は、ヒトラーにはただの「下手くそな絵」としか映らなかったのである。歪んだ顔は醜悪である、けばけばしい色彩は野蛮だ、抽象芸術は狂気の産物である、女性の淫らな姿を描いた絵は

no image

図2 ドイツの彫刻家アルノ・ブレーカー「党」
(田野大輔『魅惑する帝国』名古屋大学出版会より引用)

墮落だ、性的倒錯を描いた絵を許してはいけない、戦争の悲劇をことさらに強調する絵は陰謀だ⁽¹⁵⁾、と考えたとされる。

ヒトラーが愛した芸術は、写実的でなくてはならなかった。「美学の基本は『血と大地』。優秀なるアーリア人種の純血性と祖国ドイツの大地に根ざした文化、遠くギリシヤに源を発する文化こそ最上のものという思想のもと、芸術は選択され、生産されることになった。(中略)たとえば、男性は労働と力によって国家を支える存在として、女性は健康な子を生むための存在として、(中略)そのとき必ず重きを置かれるのは肉体であった。(中略)均整のとれた健康で美しい肉体はドイツそのものなのだった」⁽¹⁶⁾

こうしたヒトラーなりの美的価値観にもとづき、ナチスはベルリンオ

no image

図3 エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナー「夕べの牧人」
(『芸術新潮』新潮社 1992年9月号より引用)

リンピックの翌年にあたる一九三七年に、ミュンヘンで「大ドイツ芸術展」を開催し、その傍らで「頹廢芸術展」も行ったのだった。国民へのプロパガンダとして行われたこの展覧会では、前者はヒトラーが好きな写実的で力強い芸術作品を展示、後者はモダンアートを展示した。もちろん前者は「良い見本」、後者は「ダメな見本」としてである。見学した国民が何を思ったかはわからないが……。

ヒトラーが好んだ作品と頹廢芸術とされた作品を確認しておこう。図2はナチス芸術家といわれたアルノ・ブレーカー(一九〇〇〜一九二一)の作品。図3は頹廢芸術とされたエルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナー(一八八〇〜一九三八)の作品である。

こうしたヒトラーの美的価値観が、国家行事としてのオリンピック芸

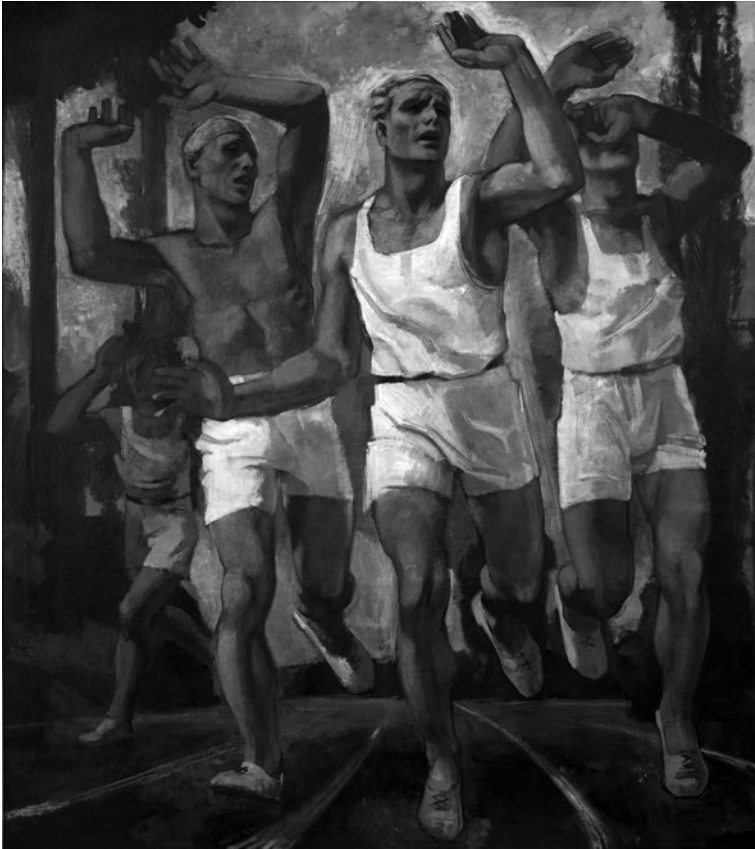


図4 ルドルフ=ヘルマン・アイゼンメンガー「ゴールするランナーたち」
秩父宮記念スポーツ博物館蔵

術競技の採点に反映したと考えられる。その前提に立つてベルリンオリンピック芸術展示のメダル獲得作品を見てみよう。

この大会では、絵画部門が「商業グラフィック(広告)」と「油絵」、「水彩・素描」という三つのカテゴリーに分かれている。日本の二人の画家がメダルを獲得したのは「油絵」と「水彩・素描」の二カテゴリーであるため、そのカテゴリーでメダルを獲得した作品を示していく。

「油絵」の金メダルは該当者なし。銀メダルはオーストリアのルドルフ・ヘルマン・アイゼンメンガー (Rudolf Hermann Eisenmenger 1902-94)

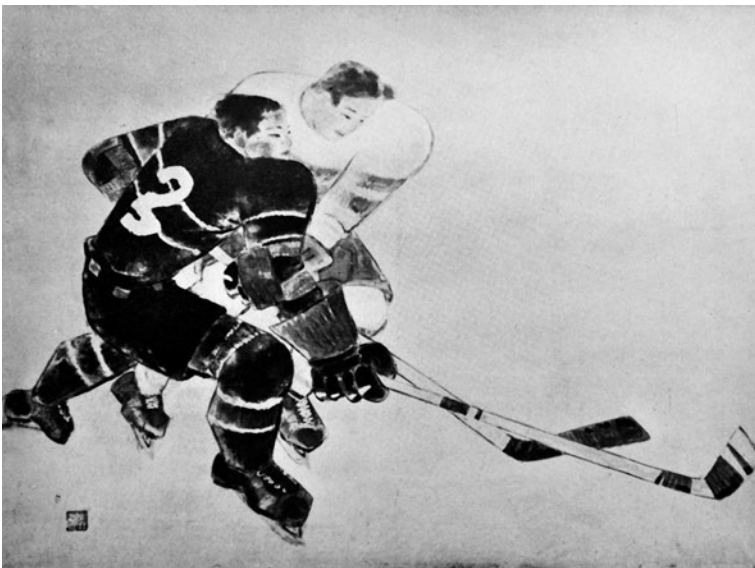


図5 藤田隆治「アイスホッケー」

の「ゴールするランナーたち」(原題/Lauter von clem Ziel)〔図4〕。銅メダルは藤田隆治の「アイスホッケー」〔図5〕であった。

「水彩・素描」の金メダルも該当者なし。銀メダルはイタリアのロマーノ・ダッツィ (Romano Dazzi 1905-76) の「フレスコ画のための四つのスケッチ」(原題/Four Sketches for Frescoes)〔図6〕。銅メダルは鈴木朱雀の「古典的競馬」〔図7〕であった。

藤田隆治の「アイスホッケー」、鈴木朱雀の「古典的競馬」はともにベルリンオリンピック終了ののち、ナチスに買い上げられたが焼失したと

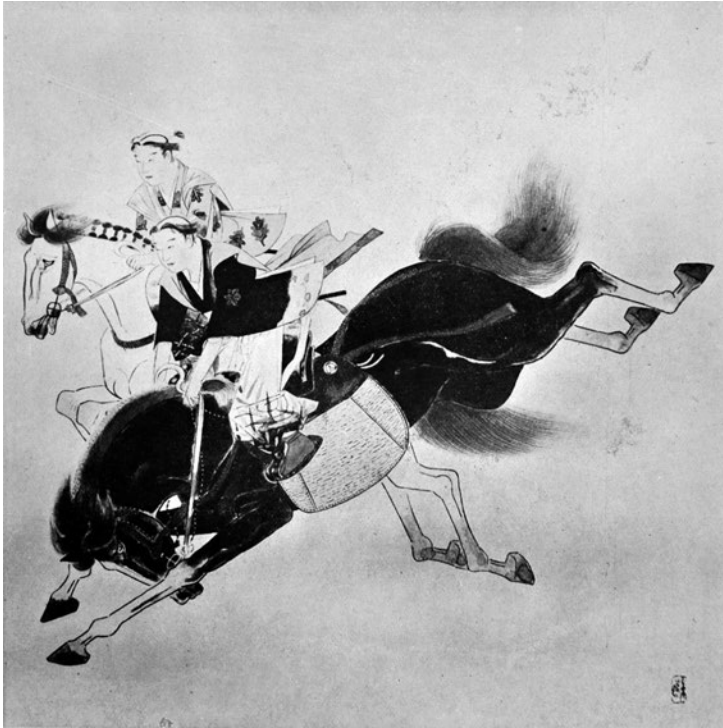


図7 鈴木朱雀「古典的競馬」



図6 ロマーノ・ダッジ
「フレスコ画のための四つのスケッチ」

伝えられている。現在は、モノクロ画像しか残っていない。ただ、「油絵」で銀メダルを獲得した「Läufer von dem Ziel」は、秩父宮記念スポーツ博物館が所蔵している。

ここに掲載した四点はそれぞれモチーフやタッチが異なるが、共通して言えることは力強さや躍動感にあふれているということである。そこにこの大会における作品の評価基準がみえる。

一方、他の日本人の作家による作品のうち、ヒトラーに頹廃芸術とされたであろう二点を示しておこう。後藤繁喜の「排球」(図8)、高田力蔵の「二つのフォルム」(図9)である。ヒトラーの価値観が反映されたと考えられる採点では、前衛的、抽象的表現は不可、写実的で力強い表現でなくては評価されなかったのだ。

さらに、受賞者の所属する国をみると興味深いことがわかる。「油絵」のメダリストはオーストリア人と日本人。「水彩・素描」のメダリストはイタリア人と日本人である。受賞者は、日本、イタリアという友好国と、その当時ドイツの圧倒的な影響下にあったオーストリアの作家であり、この二つのカテゴリーについては、その他の国の作家、第二次世界大戦の連合国に属する国の作家は受賞していない。これがもうひとつの基準と考えられる。

ヒトラーのような独裁者が、並外れた影響力、発言力を行使する国で、そもそも趣味判断でしかない「美」について評価・採点が行われた場合、その人物の思想や政治的判断、趣味嗜好などの主観が点数を左右するのは当然である。一九三六年ベルリンオリンピックの芸術競技は、残念ながらヒトラーの価値判断が基準となっていたのである。

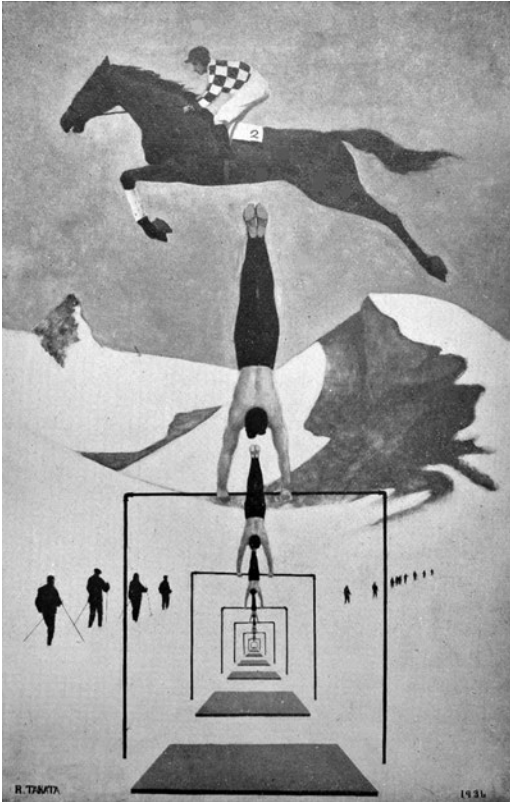


図9 高田力蔵「ニツのフォルム」

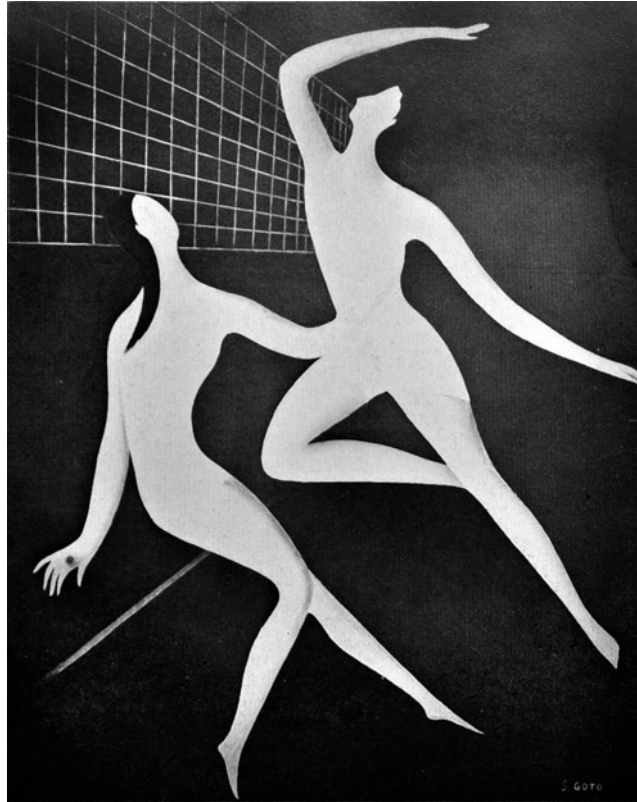


図8 後藤繁喜「排球」

おわりに

芸術においては、作者が技術的に未熟か一定の基準に達しているかの判断は、ある程度客観的に行うことができる。しかし、トップクラスの芸術家が描いた作品の良し悪しを比較するための客観的基準はない。あえて比較して順位をつけるとすれば、審査員の趣味判断による多数決によるか、強い影響力をもつ審査員に従うか、しかないのである。

「スポーツと芸術で心身ともに調和のとれた若者を育成する」というクーベルタンの理念はすばらしい。しかしながら、タイム、距離、点数などにより順位をつけやすいスポーツと、そうした客観的な基準のない芸術作品を同じように採点して順位をつけ表彰することは、はじめから無理があつたと言わざるを得ない。

「芸術競技」は一九四八年ロンドン大会で終わり、それ以降は開催国の芸術を展示する「芸術展示」となった。一九六四年東京オリンピックの芸術展示は、「テーマをスポーツに限定せず、日本の古代から近代にいたるまでの一流の芸術を展示する」との方針で、古美術、近代美術、写真、郵便切手、歌舞伎、人形浄瑠璃、雅楽、能楽、古典舞踊などの披露・展示が行われた。この芸術展示は国内外から極めて高い評価を得た。

一九九二年からは「芸術展示」が「文化プログラム」となり、それまでのファイナリスト中心の展示から、ダンスや演劇、コンサートなどさまざまな文化を披露するようになった。

二〇一二年ロンドン大会では四年間のイベントの総数は約一二万件、四〇〇〇万人以上の参加があり大成功したと言われたが、二〇一六年リオデジャネイロ大会では文化プログラムとしてのイベントがほとんど行

われなかった。オリンピックには、スポーツ競技だけでなく文化的な国際交流が欠かせない。文化プログラムが、若者や市民を主体として積極的に行われ、当初クーベルタンが望んでいたような「調和のとれた若者の育成」という目的が達成されること、さらにその理念にもとづくオリンピックがいつまでも続くことを願いたい。

〈注〉

- (1) 日本オリンピック・アカデミー編著『JOAオリンピック小事典』メディアパル(二〇一六年)。
- (2) 和田浩一「オリンピック・ムーブメントと世界平和——ピエール・ド・クーベルタンと嘉納治五郎の教育思想を中心に——」『スポーツの歴史と文化』道和本書院(二〇一二年)。
- (3) 和田浩一「筋肉と精神の『偉大な結婚』——近代オリンピックにおけるスポーツと芸術の結合——」『現代スポーツ評論』三五、創文企画(二〇一六年)。
- (4) 前掲注1書
- (5) 大日本体育芸術協会編「第11回オリンピック芸術競技参加報告」(一九三六年)。
- (6) 前掲注5書
- (7) 川成洋『幻のオリンピック』筑摩書房(一九九二年)。
- (8) 日本オリンピック委員会監修『近代オリンピック100年の歩み』ベースボール・マガジン社(一九九四年)。
- (9) レニ・リーフェンシュタール監督・映画「オリンピア『民族の祭典』」(一九三八年公開)。
- (10) オリンピックの芸術競技が廃止された理由には、「審査基準の曖昧さ」以外に、「プロである芸術家の参加が当時のアマチュア規定に抵触する」「輸送経費が莫大である」などもあった。

(11) Richard Stanton *The Forgotten Olympic Art Competitions*, Trafford Publishing, 2000

- (12) 田野大輔『魅惑する帝国』名古屋大学出版会(二〇〇七年)。
- (13) 木幡順三『美と芸術の論理——美学入門——』勁草書房(一九八〇年)。
- (14) カント 篠田英雄訳『判断力批判』岩波書店(一九六四年)。
- (15) 『芸術新潮』新潮社一九九二年九月号。
- (16) 前掲注15書

著者プロフィール

大野益弘(おおの・ますひろ) 昭和二十九年(一九五四) 東京都生まれ。筑波大学大学院人間総合科学研究科スポーツ健康システム・マネジメント専攻修了。現在、日本オリンピック・アカデミー理事、日本スポーツ芸術協会理事、株式会社ジャニス代表取締役。
福武書店(現ベネッセコーポレーション)などを経て編集プロダクションを設立。ノンフィクションライター・編集者。
著書『金メダリストのシューズ』(ポプラ社)、『オリンピックヒーローたちの物語』(同)、『クーベルタン』(小峰書店)、共著『心にくるオリンピック・パラリンピックの読みもの』(学校図書)、『オリンピックとつておきの話』(メディアパル)、『日本のスポーツとオリンピック・パラリンピックの歴史』(笹川スポーツ財団)など。